

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月22日現在

機関番号：14503
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2012
 課題番号：21530931
 研究課題名（和文）地域のスケールに応じた地誌学習の課題発見内容とカリキュラム開発
 研究課題名（英文）Development of Learning Questions and Curriculum
 Matched the Geographical Scale for Regional Geography Study
 研究代表者
 吉水 裕也（YOSHIMIZU HIROYA）
 兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
 研究者番号：60367571

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、中学校社会科地理的分野・高校地歴科地理における地域のスケールに応じた学習内容を、学習課題の発見、把握という視点から整理した上で、地理学習のカリキュラムの提案を行うことである。本研究では、中学校社会科地理的分野が、世界の州レベル、日本の地方レベルの地域をカリキュラムで取り上げていること、また、高校地歴科地理が、生活圏の課題と地球規模の課題をとりあげていることを批判的に検討した。そして地誌単元は、マルチ・スケールのアプローチで実施されるものが重要であることを述べた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to suggest the curriculum of the geography learning after having arranged learning contents depending on the scale in the junior high school social studies geography from the viewpoint of discovery / grasp of the learning questions. In this study, two things are considered critically that a junior high school social studies geography taking up the area of a world state level and the Japanese local level by a curriculum and high school geography and history department geography took up a sphere of life and a global problem. It is concluded that the unit of regional geography carried out by the approach of the multi-scale is important.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：社会科教育，地理教育，課題発見，スケール，地誌学習

1. 研究開始当初の背景

初等・中等段階の地理学習では、人文・社会諸科学の最新の研究成果を学習対象として、それらの内容のうち適切なものを分かりやすい形にして、学習内容とするべきである。

言うまでもなく「地域」は、主要な空間概念（地理学の主要概念）の一つであり、地理教育においても古くから地域を教育内容に取り込むための取組がなされているが、社会科学学習における児童・生徒の適切な課題発見内

容と方法の開発という視点から「地域」やその「スケール」の問題を取り扱った研究はほとんどみあたらない。

そこで本研究では、地域やそのスケールの問題を、特に中等教育段階の地理教育に焦点を当てて取り組むことを試みたものである。

社会科では児童・生徒が自ら学習課題をもつこと自体が、重要な学力となることが指摘されている（例えば、岩田 1993）。

なぜなら、それは問い-その答え-問いのサイクルを繰り返し、有効な問いを設定し、その答えを知識として蓄積してきた国が繁栄していることから窺える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、初等・前期中等教育段階の社会科地理的分野および後期中等教育地理歴史科地理の授業において、児童・生徒が発見・把握すべき学習課題の内容構成を、特に「地域のスケール」を鍵概念として明らかにすることである。

ここで言う児童・生徒が発見・把握すべき学習課題とは、小単元や一時間の授業を貫いて中核的に追究する問いという意味である。この学習課題は、児童・生徒が自ら追究しようという意欲を持続させるものであると共に、内容教科である社会科・地歴科の性格ゆえ、教員によって計画的に配置されるべきものでもある。

本研究が

3. 研究の方法

本研究は、児童・生徒が発見・把握すべき地理学習の学習課題を、特に「地域のスケール」をキーとなる空間概念として明らかにすること、およびそれらに基づいた授業開発・単元開発、カリキュラム開発を行うことを目的としている。

これらのために、以下の手順で研究を進める。

(1) 地域のスケールと対応した学習課題とは何かを、地理学の研究成果をもとに明らかにする。

(2) 地理学研究成果を調査し、各論文が対象とした地域のスケールと問いの対応関係を明らかにする。その際、浮田 (1970) や山崎 (2005) の方法を援用する。

(3) 地域スケールに対応した問いを用いて、地理的分野の授業の単元開発を行う。

(4) 開発した地理授業を基盤にしながら、カリキュラム開発を行う。

4. 研究成果

(1) 地域スケールと対応した学習課題

地理学研究成果のうち、スケール概念を方法論として用いている研究として浮田の研究を、また一方で、スケール概念を方法概念ではない「地理的スケール」ととらえる立場の代表として、山崎の研究を整理した。これらの研

究から、地理学におけるスケール研究では、地図学的スケールや方法論的スケールに関する研究から、より地理的現実を反映した人文・自然景観を形成する特定の具体的プロセスに即した意味内容を持つ地理的スケールへと発展しているという知見を収集した。また、これらは、ルフェーブルの「空間の生産」という概念が基盤になっているという知見を収集した。

(2) スケール概念を視点とした地理学習内容分析のためのフレームワーク構築

前述の浮田、山崎の他、スケール概念について言及している、柑本 (2008)、スミス (2000)、ルフェーブル (1974) 等の研究を参考に、地域のスケールに応じた地理学習の課題発見内容の適切化を図るための分析フレームワークを構築した。

これらの論から得た知見をもとに、地域のスケールを意識した地誌学習の適切な内容構成を図るための学習内容分析フレームワークを作成した。

視点は、地理的スケール及びマルチ・スケールのアプローチを採用しているかという 2 点である。

1 点目の、地理的スケールに関しては、地域のスケールを所与のものとして、空間的プロセスを重視する展開が見られるかを考察した。つまり、あるスケールが形成されていく過程をとらえるために、対象地域を時間軸で比較して、その動態を記述したり説明したりしているかということである。「北海道では稲作がさかんである」という記述では、そのスケールが所与のものであるといった印象を受ける。しかし、北海道で稲作が可能になったのは高々百数十年前のことである。また、「北海道では稲作がさかなくなった」というだけでは、そのスケールが形成された理由は分からない。産地や産地から消費地までのスケールの形成過程を因果関係などで説明する内容が見られるかを分析視点とした。

2 点目のマルチ・スケールのアプローチについては、様々なスケールが重層性・階層性をもって存在しているかということ、また異なったスケール間の関係性とその変化をとらえようとしているかについて考察した。ここでも、重層性・階層性、そして別のスケールへの拡張という現象の記述と、その因果関係などまでを含めた説明とではレベルが異なっている。特に、一旦形成されたスケールが、別のスケールへ拡張するスケールのジャンプ (Smith, 2000) や、グローカリゼーション (Swyngedouw, 1997) など、他のスケールへの移動現象についても、異なったスケール間の関係として下位の分析視点とした。

これら 2 つの視点と 3 つの下位の分析視点からなる分析フレームワークを設定した

(表)。

表 分析フレームワーク

視 点	下位の分析視点
地理的スケール	・空間のプロセス
マルチ・スケール のアプローチ	・空間の重層性や階層性 ・異なったスケール間の 関係

(3) 中学校社会科地理的分野の単元開発

高知市を事例地とした中学校社会科地理的分野の「身近な地域」単元を想定して単元モデルを開発した。

平成 20 年版中学校学習指導要領(文部科学省, 2008)では, 直接体験地域の地理的事象を学習対象として, フィールドワーク等を行いながら, 身近な地域に対する理解と関心を深めさせるとともに, 市町村規模の地域の調査を行う際の視点や方法を身につけさせることを主なねらいとしている。さらに, 身近な地域の学習が地理的分野の終末部に位置づけられていることから, 既習知識, 概念や技能を生かすとともに, 地域の課題を見いだし考察するなどの社会参画の視点を取り入れた探究型学習を行うことも期待されている。そのため市民的資質育成の場として位置づけられているともいえよう。それらを考慮し, 現在は野菜の促成・抑制栽培地の特色を持つ高知市春野地区を事例地とし, 地域の変貌とその要因や対策を含めた「身近な地域」単元(全 6 時間)を開発した。

① 単元目標

・(空間のプロセスと産地形成に関わる重層的・階層的スケールの存在) 園芸農業に特色がある高知市春野地区では, ナス, キュウリ, フルーツトマト等の野菜を栽培している。野菜栽培地としての春野地区は, 荒地の開墾, 水田地の利用, および指定野菜産地としての集団集・出荷体制の確立, 消費地の確保などにより実現したことを, 産地形成プロセスを通して理解する。

・(異なったスケール間の関係) 野菜産地としての地位を維持拡大していくためには, 産地間競争, 輸入野菜や規制緩和要求などの国際的圧力にどのように対応していくのかという問題があることを産地の再編プロセスを通して理解する。

・(異なったスケール間の関係) 春野地区の農業の現状, 県の農政, 国の農政および国際的な動向を踏まえ, これからの春野地区を予測し, 春野地区の農業を発展させるためにはどのような手だてがあるのかを考えることができる。

②開発した単元のもつ意義

これまで地図学的スケール, 方法論的スケールなど, スケールの概念を方法論的にとらえた研究や授業実践が見られたが, 社会科が

内容教科である点から, 単なる方法論的概念ではなく, 方法的側面をも含みながら, 地理的内容を反映した地理的スケールの概念を組み込んだ授業実践の必要性を論じたこと。

社会事象や地理事象は, 重層性・階層性を持って存在すること, そして, 異なったスケール間の関係性を読み解くことでその本質が見えてくるといふマルチ・スケールのアプローチを採用することによって, 社会事象や地理事象がよりの確に把握できるということについて論じたことが単元を開発した意義である。

(4) 高等学校地歴科地理 A の単元開発

高校地歴科地理 A の防災単元と生活圏の課題単元を融合し, 「防災ガバナンスと地域コミュニティ問題」という単元を開発した。

① 単元目標

・日本にはどのような災害が発生しており, それらの災害に対して, 国や地域がとってきた対策の実態とその理由がわかる。

・身近な地域には, どのようなテーマコミュニティがあるのか調査することをおして, 地域の包摂力の大きさが推測できる。

・身近な防災関連施設の分布やデザインは, 地域の特性に基づいて決まっていることがわかる。

・ガバナンスとは, 集団の構成員が主体となって, 規律を重んじながら目標に向かって意志決定や合意形成を行いつつ円滑な運営を図ることであり, 状況依存的で再編途上にある制度編成であることを知り, その上で具体的な事例について, 資料に基づいて議論しようとする。

②開発した単元のもつ意味

甚大な被害を与える自然災害の場合, 防災コミュニティが防災ガバナンスとして機能すれば復興が早い傾向がある。そこで, 本単元では防災コミュニティの理想を防災ガバナンスと捉えた。それはルフェーブが, 空間の生産に関わっては, 空間の表象, 空間の実践, 表象の空間という 3 つの空間次元が必要であるということとも関連している。防災ガバナンスは, コミュニティと行政を緩やかな対立軸と捉えながらも整合させることを志向する。しかし, その形は定まっておらず, 様々な地域の実情に合わせて変化するため, 一定の枠組みで理想の形を捉えることが難しい。そのため成功例をケーススタディし, 身近な地域と比較しながら, 復興を民主的に議論する場を設定した。この姿勢が防災ガバナンスのアクターの要件となる。防災ガバナンスのアクターを養成するために, 地歴科では, 成功例のケーススタディをおして得られた知見を用い, 復興の総論と各論を論じる機会を与える。これらにより, 社会系教科の授業が, 主体, つまりアクターをはぐくむコ

ンテナとなるのではないか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① Hiroya Yoshimizu(2013) Multi-Scale Geography lesson using the Concept of Geographical Scale: For Better Dynamic Geography Lesson, The Journal of Social Studies Education vol.2, pp.25-33.

② 吉水裕也(2012) コマンドワードの使い分けを, 東書Eネット

③ 吉水裕也(2012) 地域の形成プロセスを重層的に認識させる地理教育へ, 新地理 60-1, pp. 83-84

④ 吉水裕也(2011) 地理的スケール概念を用いたマルチ・スケール地理授業の開発ー中学校社会科地理的分野「身近な地域の調査『高知市春野地区』」を題材にー, 新地理 59-1, pp. 1-15

⑤ 吉水裕也(2011) 科学的探究と空間的投影, そして地理的スケール概念による考察ー学習方法・学習活動の観点から, 地理 56 巻 3号, pp. 35-39.

[学会発表] (計3件)

① 吉水裕也(2012) 防災ガバナンスのアクターとしてのコミュニティ再生問題に関する単元開発ー高等学校地理A「自然災害と防災」, 「地域の地理的諸課題と地域調査」単元を通してー, 2012年2月, 社会系教科教育学会 課題研究発表, 兵庫教育大学

② 吉水裕也(2010) 科学的探究と空間的投影, そして地理的スケール概念による考察 学習方法・学習活動の観点から, 2010年11月, 全国地理教育学会, 文京学院大学

③ 吉水裕也(2010) 「地理的スケール」概念を用いたマルチ・スケール地理学習の開発ー「身近な地域の調査『高知市春野地区』」を題材にー, 2010年6月, 人文地理学会第270回例会(特別例会), 高知市立自由民権記念館

[図書] (計1件)

① 吉水裕也(2009) 「社会科における学習課題をめぐる理論」, 岩田一彦編著『小学校社会科 学習課題の提案と授業設計ー習得・活用・探究型授業の展開ー』, 明治図書, pp. 22-36.

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

なし

○取得状況(計0件)

なし

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉水 裕也 (YOSHIMIZU HIROYA)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号: 60367571

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし